The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

江戸時代における『金七十論』研究
——発展への一要因——

興津香織

1　はじめに

日本で『金七十論』の注釈書が確認されるのは、『金七十論』が元禄十年（一六九七）に単行出版後の江戸時代中期から二百年ほどの間のみであり、まさにその時期は代表的な学僧を大量に輩出した仏教研究の最盛期と重なる。仏教外の書で伝統的に敵対する傾向にあるため、それ以前にはなされた形跡のない『金七十論』研究が同時に進められたのである。その背景にある学問的な要請とは何だったのか。本稿では『数論二十五諦記』という写本をもとに『金七十論』の注釈書が出現する前の段階に見られた特徴とその影響を考察し、『金七十論』研究発展への一つの要因として検討したい。

2　『数論二十五諦記』

正式な題名は『数論二十五諦記　解倶舎光記』（以下『二十五諦記』）で、龍谷大学と東北大学に写本で所蔵されている。今日まで注目されなかったが、一連の研究[1]により、智山派の道空（一六六六—一七五一）によって書かれた『倶舎論光記講輯』（以下『講輯』、『智山全書』第十三巻所収）からサーンキヤ説を抜粋・加筆し、新たな題をつけ独立の書に作り替えたものと判明した。よって『二十五諦記』の元である『講輯』の成立は道空の生存した期間と限定できるが、『二十五諦記』の成立に関する問題は残る。龍谷大本は『金七頌因明合本』（ママ）という題の上に「二十五諦記」「藻鏡」「私記」とあり、『金七十論藻鏡』、『金七十論私記』[2]、『金七十論頌』、『数論二十五諦略図』とともに収録されている。『藻鏡』は豊山派の林常快道（一七五一—一八一〇）の作として既に知られ、『私記』末尾と『略図』の始めにも〝快道師の作〟とあり、『二十五諦記』も快道作と考えられたようである。一方の東北大本は合本でなく、尾題の後に知新房圓秀とあり本文の文字と一致することから豊山派の圓秀（一六八六—一七六六）によって書写されたことがわかる。圓秀[3]は長谷寺第二十六世であるが伝記等は伝

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

わらないため作者かは判断できないが、この記述に従えば『二十五諦記』は圓秀が生存した頃、すなわち『金七十論』の注釈書が作られるより前に倶舎学の中からサーンキヤの綱要書が作られたことになる。[4]

3　『倶舎論光記講輯』

『倶舎論』を注釈した普光の『倶舎論記』（以下『光記』）に対する注釈書である。サーンキヤ説への言及は第三巻、第七巻、第十三巻の三箇所で、七巻と十三巻では中国で成立した注釈書を用いるに留まるが、三巻はそれらとは異なり体系全体を検討する意図が見られる。注釈の対象は『倶舎論』の二十二根で、各種の機能を有する（という意味で力が優れている＝増上）から根として立てられると定義し、それぞれが条件を満たすか確認し、二つの問題を提示する。一つは無明等も原因として行等の結果を生ずるという機能を有するから根として立てるか。もう一つが発声器官・手・足・排泄器官・生殖器官もそれぞれに語る、物を手に取る、歩く等の機能を有するから根として立てるかである。それを『光記』は一つ目は十二縁起に、二つ目はサーンキヤ説に基づく問いと説明し、続いて二十五諦を提示する。『光記』と同じ二十五諦説は『成唯識論述記』（以下『述記』）に見られ、訳語は合致しないが『百論』も同様で、『大智度論』も『光記』に近い。『因明入正理論疏』やその他の基の著作も同様である。[6]普光のサーンキヤ説の知識は基に近く、玄奘から弟子たちに伝えられたといえる。[5]

道空は先の二問については『光記』よりも簡略だが、二十五諦説に関しては体系全体を考察し、この部分が『二十五諦記』へと発展することになる。考察部分の圧倒的な分量から、道空の関心の高さが窺える。その中のある記述が後の『金七十論』研究へと繋がっていった可能性について次の項で考えたい。

4　玄奘と真諦のサーンキヤ理解と訳語の区別

以下は二十五諦中の「我」についての検討である。

言二十五諦者一我彼計常我以思為體性但是受者而非作者餘二十四諦是我所是我之所受用[7]

「我」は「思」を本質とし、受者という性質を持つ。「我」以外の残り二十四諦は「我」が受用するものであると『光記』は説く。道空はそれを受けて重要な指摘をする。

我以思為体者七十論不見此説

「我以思為体」（我は思を以て体と為す）は『光記』のサーンキヤ説の「我」の特徴であるが、『金七十論』にはないと道空は指摘する。『金七十論』で説かれる「我」には「思」という本質はないということになる。道空は具体例として次に『述

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

記』を引用するに留まるが、この指摘は後の『金七十論』研究へと繋がる重要な視点である。その証拠が次の一文である。

廣百論等及因明大疏并唯識疏等中其文不暇枚挙

これは道空によるものではなく、『二十五諦記』だけに存在する文である。前の道空の指摘を受けて書き加えられており、「《我は思を以て体と為す》という文は広百論等、因明大疏、唯識疏等においてたくさん見られる」というのである。「広百論等」とはすべて玄奘やその弟子が関係する書である。「我は思を以て体と為す」は真諦訳『金七十論』には存在しないが、玄奘系統の書には数多く見られるとして、ここにサーンキヤ理解において真諦と玄奘では相違があると表明する。実際に検証すると、[8] 玄奘系統の書において「我は思を以て体と為す」とあるのに対し、『金七十論』では「我」の本質は「知」（精神的なもの）であり、これらの原語は cetanā であった。玄奘系統では「思」、真諦は「知」と解釈・訳語が異なる。サーンキヤ説では真諦の「知」の解釈が適切である。

玄奘系統の書で「我」の本質を「思」とするのは、玄奘が仏教における「思」の解釈を取り込んで理解したことに起因する。『倶舎論』の心所法の「思」の解釈[9]等を見ると、仏教における「思」は志向、意志の発動という心を造作させるものである。玄奘系統の書では「我が諸々の対象を受用しようと〝思うことによって〟、自性は転変を開始する」すなわち「我」が受用したいと思って、自性に転変という行動を起こさせるという点が志向・意志の発動という「思」と解釈されたのである。

5　玄奘と真諦の違いという意識

『二十五諦記』の指摘が後の『金七十論』研究に与えた直接的な影響は今のところ見出せない。「思」と「知」の違いはサンスクリットの原語を見なくては検証できないため、江戸時代にこの指摘がどう捉えられたのか辿るのが困難である。また『金七十論』注釈書はかなりの数存在し、大半が容易に見られないため今後の課題としたい。

ただ『二十五諦記』が発端とはいえないが、後の研究最盛期には玄奘と真諦の違いに着目する傾向が見られるようになる。特に快道の『阿毘達磨倶舎論法義』では、「戒禁取見」を解釈する中で真諦訳が大きく関係する。「数と相応との智等」という語について快道が指摘するように、真諦の『阿毘達磨倶舎釈論』で「数」とはサーンキヤ学派、「相応」とはヨーガ学派を示すのが正しい。快道が「若し爾らざれば、旧論に梵名の存するは何為ぞ。彼の梵名に於いて、数と相応の智の了解生ぜざるが故に真諦三蔵は殊に後来の迷ひを恐れて特に本音を置くなり。」とわざわざ記したのは、『光記』[10]が「数と相応する智」と解して「尼揵子」（Nirgrantha ジャイナ教徒）の

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

説とした誤りを正すためである。また『倶舎論』の「持息念」については『金七十論』の五風を別のものとしながらも引用する。玄奘と真諦の訳語の区別というだけでなく、『金七十論』（真諦の訳）を仏教の説をより理解するための補助として使用する。他にも「尸羅」(śīla 戒)を解釈する中に真諦訳を引用し、それに関連して『金七十論』にも言及する。

6　結論

江戸時代の『金七十論』研究は仏教研究の最盛期と重なり、『二十五諦記』はその直前に成立したと考えられる。『金七十論』の注釈書が作られる以前に『二十五諦記』のような『倶舎論』研究からの抜粋が現れたことにより、性相学において受け継がれてきた玄奘の理解するサーンキヤ説と『金七十論』のサーンキヤ説との相違に着目し、玄奘系統のサーンキヤ説に対し批判的に検討をするという新たな視点が窺える。『講輯』から展開した『二十五諦記』には『金七十論』研究発展への要因が含まれている。

1　『数論二十五諦記』についての詳細な検討は拙稿「『数論二十五諦記』について」（『仙石山論集』第四号、平成二十年十一月）（＝興津〔二〇〇八〕）を参照。

2　快道には『金七十論私記』という著作が目録上にのみ存するが、実態は未詳である。この合本に収録された「私記」がそれに該当するかは現在検討中である。

3　圓秀は根生院周海と弥勒寺栄慶の護持院後薫争いの解決に能化として奔走した。その当事者周海は天明の三哲（法住、快道、戒定）が世に出る性相学全盛期の基礎を作った人物として仏教研究史上重要な位置を占める。三哲の内二人（法住、快道）が『金七十論』の注釈書を著したことも注目に値する。

4　『金七十論』開版の際に、如海日妙（？―一七一一）が訓点を付したことに始まり、無着道忠（一六五三―一七四四）が『数論外道計略図』、香山宗朗が『金七十論解』（一七七三刊）、暁応厳蔵が『金七十論備考』（一七六九刊）と以下、豊山派の法住、快道、智山派の海応など当時の著名な学僧により続々と注釈書が作られていった。

5　『倶舎論』第三巻、大正二九、一四頁上。

6　『光記』と同様のサーンキヤ説が見られる文献の出典等詳細は興津〔二〇〇八〕を参照。

7　『光記』第三巻、大正四一、五八頁上〇六―〇八。

8　興津〔二〇〇八〕を参照。『二十五諦記』の指摘通り『述記』『成唯識論』『大乗広百論釈論』『因明入正理論』『因明入正理論疏』等に見られる。

9　受想思觸欲慧念與作意勝解三摩地遍於一切心―中略―思謂能令心有造作。（『倶舎論』第四巻、大正二十九、十九頁上二四―一九）*cetanā* cittābhisaṃskāro manaskarma / P. Pradhan ed., "Abhidharmakośa bhāṣya of Vasbandhu", Patra, 1967. p.54.

10　『倶舎論記』第十九巻、大正四一、二九八頁中一九―二〇。

〈キーワード〉　金七十論、倶舎論、道空、玄奘、真諦、cetanā

（國學院大學非常勤講師）

NII-Electronic Library Service